

口頭発表 第2回 第16分科会
障害者を取り巻く状況Ⅱをきいて

初めての体験だった。会場の雰囲気緊張もしたし、内容も難しく理解できなかったかは自信がない。第16分科会のテーマが障害者を取り巻く状況の内、就労・雇用に関係する事だったので、僕自身の長かった就労活動を振り返ってみようと思います。

僕は都立の定時制高校を卒業しました。教室内の生徒は年齢や身なりの様々な人がいましたが、小学校、中学校の時のようなイヤガラセをする人がいなかったのが、一番良かった。先生の中には生徒を見下したような先生もいましたが、大部分の先生が勉強したいと頑張っている生徒には仕事で遅刻する生徒にも、ていねいに指導していた。4年の時の文化祭（全日制と共催）に、4年間書きためていた学校生活を文集にして展示したところ、好評だったので、卒業後、祖父が卒業記念に自費出版してくれて、お世話になった人に贈った。そのうちの1人、区の福祉事務所の人が、区の図書館に置くように手配してくださったので、僕の本を図書館の棚に見つけた時はちょっと照れ臭いような嬉しい気分になった。母校の中学校の校長先生の目にとまり、区の教育委員会との共催で在校生と地域の人を対象に講演会をしました。その年、定時制高校への進学希望者が増え、進路指導の先生があわてたという話を聞きました。

高校卒業後の進路は、大学進学かな、とっていました。担任の先生から推薦もあると言われましたが、学部がしぼれなかったことと、母から社会人として生きる事が大事だと言われ、職安に相談に行ったら、高校生は学校を通してと言われ、担任の先生と職安へ行き、池袋の職業センターを紹介されました。この時始めて障害者であることを知りました。その後戸山の都立心身障害者福祉センター（心障センター）で判定を受けて手帳を取得しました。ここから約10年、池袋の職業センター、心障センター、杉並区雇用支援事業団、所沢の国立職業リハビリテーションセンター(職リハ)で訓練を受けた後、10ヶ月のボランティア体験をして、現在の職場の非常勤介護職員として働いています。職リハでの実情は、2005年第13回職業リハビリテーション研究・実践発表会で母が論文発表しています。介護コースで訓練を受けるはずでしたが、実際は入り口は介護コースでしたが、途中から訓練内容が事務販売コースになり、履歴書の提出先に介護関連はありませんでした。訓練途中でのコース変更の不審を感じた母が、独自にヘルパー2級をとる手配をしてくれて職リハの修了後すぐに2級の資格をとりました。

訓練終了が近づくと、連日履歴書を書く練習です。合同面接に行ったりと忙しくなりました。職リハを通さないで、自分で応募したりする時は前もって職

リハに報告するよう言われていました。区報で、ふれあいの家の職員募集を知りました。職リハで取得したヘルパー3級で応募出来るということだったので、職リハに応募した事を伝えましたが、職リハの僕の担当の人が「応募したのは知的障害者ですよ」と、ふれあいの家の運営母体の社協に電話したらしいです。職リハの修了式が済んでも、なかなかふれあいの家から返事がないので、あきらめて3月末に前から予定していた屋久島の平田さんに会いに行きました。屋久島に着いたその日に、家から今日面接に来るように電話があったと連絡して来ましたが、とても無理。職リハからの電話が、むしろ社協の会長さんに興味を持たせたらしく、屋久島から電話をして会いに行かれないと伝えた所、帰ってからで良いですから一度来てください。という返事でした。

4月早々会長さんと会って2人で30分位話をしました。「君は個人のお宅で仕事をするよりも、施設が良いでしょう。探しましょう」と探してくれたのが自転車で自宅から約20分の特別養護老人ホーム上井草園です。

5月からボランティアで洗濯の仕事をしました。社協は僕に担当者をつけて、施設との間の調整役をしてくれました。2ヶ月毎には母と洗濯担当者の人と施設の人とのミーティングもありました。10ヶ月たった3月に、母が社協の担当の人に上井草園を運営しているサンフレンズの職員は何人位なのかたずねたところ、しばらくして障害者は一人も雇っていないので、源君を4月から雇いたい。と返事があり、僕も仕事をしたいと答えたので雇用される事になりました。以上が僕の就活の全てです。

この10年の就活期間中、様々な人に会いました。障害者に対する健常者の姿が濃縮されているように感じます。上から目線で障害者を劣る人間ととらえる人がいる一方、同じ人として共感してくれる人もいました。今回の5人の発表を聞いてその両方を感じました。最初の「障害者雇用制度の改正等に伴う企業意識・行動の変化に関する研究」は障害者職業総合センターで事業主支援部門に所属する人の発表でした。雇用側に立つのは仕方ないと思います。制度が良く評価されたいというのは当然かとは思いますが、その事が仕事をする障害者にとって幸せにつながるかは疑問です。2番目は就労アドバイザーとして活動している人の報告でした。就労によって能力が拡大する事もある。僕も同感です。けれども特別支援学校出身者が対象なので全ての障害者に当てはまらないのが残念でした。3番目は清水弁護士でした。その次の発表は「ドイツの権利条約締結国における批准後の取り組み」についてでしたが、あまり良く理解出来ませんでした。5番目は「障害者支援の効果的な取り組みに関連する信念、知識、外的環境の分析」という長い表題で僕の理解をはるかに超えているなと思いました。障害者就労には障害者と事業主の両方に支援が続く事が両方にとって有益だ。ということのようでした。

以上の発表にはどれも支援という言葉が使われていました。支援なしでは何事も解決へつながらないということなのではないでしょうか。大切なことは支援の中身です。発表の中で言われている支援はマニュアル化された支援を言っているのかと不安になりました。

僕が杉並区障害者雇用支援事業団で訓練を受けていた時こんなことがありました。その時は区役所や保健所の封筒の印刷をしていました。印刷機がひんぱんに止まってしまうので上司に申し出たところ「君の行いが悪いからだよ」と相手にしてくれませんでした。その後職業センターからの紹介で、職リハで訓練できることになったと伝えた時には「何で君が行けるの」と驚かれたのが驚きでした。それぞれの機関で、本当に障害者の立場に立って訓練・支援してくれるかが大問題です。とくに知的障害者の場合、人によって対応と、必要な支援は違ってきます。そしてその人にとって必要な支援自体を本人が十分に伝えられない。というのが難しい所です。そういう意味で支援はマニュアル通りにはいかないと思います。頭ではなく、心で、人として感じてほしいです。

僕の場合、仕事をすることは収入を得る手段ではありますが、それ以上に社会と関わっているんだ。家族だけではない生きる場があるんだという感じを持つことが、大きな意味を持っています。特に知的障害の人は、自分の思いや気持ちを即座に伝えるのが難しいです。僕自身突然何か言われたり、強い口調で言われると怒られてる気持ちになって頭の中が OFF になってしまい、行動がストップしてしまいます。気持ちが落ち着いて言われた事について考え始めた時にはタイミングが大巾にずれていて答える時がとっくに過ぎているということがよくあります。

そんな中で清水弁護士の記事の冒頭の一文が印象に残りました。「障害のある教師はそれぞれの障害の特性を職場や生活の場を克服し、児童生徒にとってのロールモデル（具体的な行動技術や行動事例を模倣学習する対象となる人材）の役割を果たしている。」

僕の小学校の卒業式の時、証書を校長先生から受け取る時、壇上で一言将来の希望を言うのですが、その時 3 人の女子が「障害者の役に立ちたい」と発言したそうです。3～4、5～6年の時のクラスメイトでした。今は養護学校や健康学園の先生になっていると聞きます。普段の生活の中で当たり前に関わることが障害者理解に大事なんだと思います。障害があっても同じ人なんだということを、誰もが自然に感じ、力まず生活できる社会が僕の夢です。そうした日々の中から本当に必要な支援が生まれてくると思います。一緒に仕事や生活をしていて、この人と一緒にやっていくにはどんな工夫があったらやりやすいかに気づいて実行するのが支援だと思うのですが、それには人としての感じる力を働かせることが欠かせないと思います。